

第三〇回 光華講座

親鸞聖人二十九歳・叡山下山の理由

文化功勞者

前田 惠 學

はじめに

只今ご紹介頂きました前田でございます。初めてお目にかかる方が大部分のように思います。私の名前は前田惠學（えがく）と読みます。よく似た名前がもう一人おりまして、專學（せんがく）と言います。専ら學ぶと書きます。私の弟でございます。子供の時には「えがく」と「せんがく」で、発音が違うものですから、耳に聞いた時には間違ふことはなかったのですが、東京へ出まして、同じ研究室で勉強したものですから、今度は目で名前をご覧になると「惠」と「專」と、「寸」と「心」が違うだけなものですから、しよっちゅう間違われて、公の文書なんか

も、時々間違ってきたりすることもありますが、迷惑をしていると書いてお互いに牽制をしておるわけでございます。私のほうは「仏教学」をやりました。弟のほうは「インド哲学」でありまして、二人合わせてもまだ一人前になれないなあと、言っているのですが、まあ、よろしくお願いを致します。

叡山下山

—その理由

今日のお話の主題は「親鸞聖人」でございます。親鸞聖人が九歳の時に比叡山に登られ、それから二十年間、比叡山で勉強なさって修業なさったあと、比叡山の修業をおやめになって、比叡山を下山せられるというのが親鸞聖人の生涯の一大決心だったと思うのですが、その理由につきまして、まだハッキリしていないと言っているのではないかと思います。他にも例えば、親鸞聖人が六十過ぎられてから関東から京都にお帰りになるわけですが、その時の理由も、学界では明確にはなっておりません。そのような訳でまだハッキリしないことがいくつもあるように思いますが、そのうちの一つを今日はお話を申し上げたいと思います。

— 臨終 —

話の順序といたしまして、親鸞聖人がお亡くなりになった時のことをちよつと申し上げたいのでございます。「御伝鈔」下巻第六段のところ、「頭北面西右脇に臥し給いて」とあります。北枕で顔は西を向いておられる。右脇が下であります。「右脇」というのは右脇うきわきが下になるのです。「ついに念仏の息たえましましおわりぬ」。このように「御伝鈔」に書いてありまして、これが親鸞聖人、最期のご様子であるというふうに、私は前からそういうことで皆様にお話をしておったのでありますが、これは後で申し上げますように、最近ちよつと考え方が違つてきているということ、予め申し上げておきたいと思ひます。

この時、一緒にご臨終に遇われた方は、息男の益方、息女の覚信尼公、それから弟子の顕智さん、専海さん、こういう方々であつたと伝えられています。それから、親鸞聖人が亡くなったのは十一月二十八日であります。十一月二十八日に亡くなれると二十九日がお葬式(火葬)、三十日がお骨上げ、その後で、十二月一日に覚信尼公、つまり親鸞聖人と奥方の覚信尼公の間の娘さんであります。覚信尼公は越後においてになりましたので、越後の奥方つまり母上に、ご報告をされるわけです。覚信尼公のご返事、母上から娘さんへのご返事となるのが「覚信尼文書」とか「覚信尼消息」とか言われている文章であります。ここに、「昨年こぞの十二月一日の御文、同二十日にあまりに、たしかに見候いぬ」とありますからお葬式の終わったあとですぐにご報告をなさつた。そのご報告が十二月二十日頃、新潟に着いたわけです。「何よりも、

殿の御往生、中々、初めて申すにおよばず候う」。奥方は聖人を殿と呼んでいられます。覚悟を決めておったことでもありますから、今更、何もその点については心残りはありません、といううな気持ち表われているように思います。

——六角堂

その次、「山を出でて」、山は比叡山であります。「山を出でて、六角堂に百日こもらせ給いて」。ここからはつまり恵信尼公が御自分の娘さんである覚信尼公にどうしても伝えておきたいことをいろいろお書きになっています。かなり長い文章ですけれども、一部をここに引用して説明します。「山を出でて、六角堂に百日こもらせ給ひて」。比叡山を出て、そして京都の町の真ん中にあります烏丸通りの、本山から北の方にある頂法寺に六角堂がございます。その六角堂に「百日こもらせ給ひて」、六角堂は、当時おそらくいろいろな人達がお籠もりをなさる、聖徳太子ゆかりの寺でありまして、この六角堂には、救世観音がお祀りしてあります。そこで百日お籠もりになったわけでありまして。「後世を祈らせ給いけるに」。この文章の中に、「後世」として三ヶ所出てきます。「後世を祈らせ給いけるに、九十五日のあか月、聖徳太子の文をむすびて、示現にあずからせ給いて候いければ、やがてそのあか月、出でさせ給いて」と。この聖徳太子の文とというのが何なのか、異論はありましたが、一応固まってきたりしている考え方は、「行者宿報設女犯、我成玉女身被犯 一生之間能莊嚴 臨終引導生極楽」の文であります。修行者が宿世の因縁によつて女犯をしなければならないというか、妻帯をしなければならないという時には、「我」は六

角堂のご本尊救世菩薩が「成玉女身」、玉のような女性の身となって、あなたに犯されるでありましょう。「一生之間能莊嚴」、一生の間よく身を飾り、命終わる時には、引導をして、引き導いて極楽に生まれさせよう、という意味であります。「聖徳太子の文をむすびて」というのは、そういう内容だと理解され、親鸞聖人はこの時たぶん女性問題を悩んでおられたのではないかというの、非常に有力な説になってきました。

それもあるかもしれませんが、しかし、「後世を祈る」というのが、この『惠信尼文書』の文章の主題であります。何か夢の間に救世菩薩が聖徳太子のお姿となられ、真つ白な衣をつけて現われられて、そして女犯の偈を親鸞聖人に告げられた、と言われているのでありますが、しかし私はその問題もあったかもしれないけれど、親鸞聖人が、目指された目的とは違っていたと思うのです。その目指された内容とは「後世」の問題を解決することだったと思います。女性問題も「後世」に関係ないわけではございませんので、否定はできませんけれども、それよりも親鸞聖人の心に掛かっていたのは「後世」だった。ですからまた「後世」が出てくるわけです。九十五日目、つまり百日の計画でお籠もりになったのでありますけれども、夢のお告げを得られたものですから、九十五日で引き上げてしまわれて、そしてその次に、「後世の助からんずる縁にあいまいらせんと、たずねまいらせて、法然上人にあいまいらせて」とあります。六角堂のお籠もりの目的は、達成しなかったけれども、もうこれでおしまい、ということだったと思うのです。そして、さらに「後世」の助からん道を求めて、法然上人のところへおいでになったと、私は理解しています。

——法然上人

そういうわけで法然上人は、「後世」の問題を解決して下さるはずだと。これはおそらく、比叡山で親鸞聖人は、法然上人のことを聞いておられたのでありましようけれども、六角堂にお籠りするとき、他にも恐らく参籠者が大勢おられて、その人達が法然上人の噂をしていられたに違いないと私は思います。その人達から聞かれて、それではやっぱり法然上人のところへ行くのがいいだろうと、お考えになったのではないだろうか、というのが私の推測でございます。推測に推測を重ねるとダメになります。これは私の恩師の辻直四郎先生から厳しく言われました。推測は一回だけだと。それ以上推測を重ねたらもう砂上の楼閣になる、というのが辻先生の教えで私の未だに忘れない考え方であります。

そこで、今度は法然上人のところにおいてになります。「六角堂に百日こもらせ給いて候いけるように、又、百か日、降るにも照るにも、いかなる大事にも、参りてありしに」。法然上人のところへです、今度はまた百日おおいでになった。「後世の事は、善き人にも悪しきにも、同じように、生死出ずべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候いしをうけ給わりさだめて候いしかば」。法然上人はどんな人が来られても「生死出ずべきみち」、この煩惱の身を離れて、そしてお悟りを頂く、それには念仏以外道はないということ、誰に対しても同じように法然上人は、なんべんもなんべんも繰り返し繰り返し同じことをお説きになっていらっしやる、ということだろうと思えます。ですから親鸞聖人は毎日のように同じ話を聞かれたと思えます。どうしてそんな

に毎日聞かなければならなかったか、いっぺんでわかるではないかというふうに思われるかもしれませんが。例えば、熊谷直実の話が有名であります。熊谷直実は鎌倉武士として知られた侍で、どれほど人を殺めたかわからないような人ですが、ひとたび法然上人のお話を聞くと、たどころに自分の今までの所業を悔い改めて、この自分のようなものは、手足をもぎ取られてもしょうがないような、我が身であります。ところが法然上人のお話を伺うと、一度でも南無阿彌陀仏を唱えるだけで浄土に参らせて頂けると、こんな嬉しい話があるか、というので、その場でたどころに悔い改め弓矢をすてて出家したというような話が伝わっています。そこへいくと、親鸞聖人は百日も通われて、やっと納得されたという感じですが。しかしこれはアマチュアとプロの違いでありまして、親鸞聖人はプロなのです。比叡山で二十年も勉強をして修業をしてこられたのです。その方が、そう一回でコロッといくような訳にはまいりません。心から納得できるまで、言わばこれは「転向」でありますから、時間がかかります。百日の間、通い詰めて通われたということでもあります。そして「上人のわたらせ給わんところには」、法然上人がどこへおいでになるとしても、「人はいかにも申せ、たとい悪道にわたらせ給うべしと申すとも」、悪道は地獄であります。「世々生々にも迷いければこそありけめ」。この「世々生々にも迷いければこそ」、今のこの世だけのことではないのだ、この前の世、その前の世、何遍も今まで生まれ変わり死に変わりして、その間ずっと迷い続けてきたのだというのが、「世々生々にも迷いければ」であります。そのように「思いまいらする身なればと、ようように人の申し候いし時も仰せ候いしなり」と。そういうわけで親鸞聖人は、この法然上人のところへおいでになって、人が様々に言っ

でも念仏をしつかり頂かれるということになるわけです。

——比叡山での修行

それでは、比叡山でどんな修業をなさったかということでもあります。この恵信尼公のお手紙の中で、親鸞聖人は比叡山で「常行三昧堂」の堂僧をしておいでになったということが、明らかになりました。

今の比叡山では「にない堂」と申しまして、「常行堂」と「法華堂」が渡り廊下でつながっています。この常行堂、常行三昧堂とも申しますが、ここはなかなか中は見れないようであります。いつも修業をしておいでになる方がいらっしやるので中は見れない。図面では左が「常行堂」で、中央の四角いところに阿弥陀様がお祀りしてあります。それから右の方は「法華堂」ということで、これは、普賢菩薩がお祀りしてあります。この二堂が廊下で繋がっております。荷物を前と後ろにふり分けて肩に担ぐような感じだものですから、「にない堂」という名前がついております。「にない堂」からさらに奥の方へまいりますと「釈迦堂」があります。この「常行三昧堂」で親鸞聖人が「不断念仏の行」を行ぜられたと言われるのですが、やはりこの諸堂の配置を充分考えなければいけません。(『重文延暦寺常行堂及び法華堂修理工事報告書』昭四三、真陽社、小山正文氏拝借本) 女犯の幻影ばかりに目がいつておりまして、何をこの比叡山で修業されたか、そこから親鸞聖人の本当の悩みが出てくるわけでありますから、それを理解しないと、親鸞聖人が比叡山を出られた理由がわからない、ということになると思うのです。

常行三昧とは、傳教大師最澄(七六七―八二二)が定めた四種三昧の一つで「般舟三昧経」を根拠として、不断念仏を行ずるものです。夜も昼も、絶えることなしに念仏を唱えて歩くわけです。お堂の中央に阿弥陀さんが安置してあります。これは現在のところ、座っておいでになる阿弥陀さんです。背もそんなに大きくありません。小さい阿弥陀さんがお祀りしてある、その周りを回りながら念仏を唱えるということであります。「円仁(七九四―八六四)にいたって常行三昧堂がはじめて建てられ」、「その後諸寺に常行堂の建設を見」たと言われ、念仏流行の端緒となりました。般舟(pratyuppanna)とは、「対して近く立つ」という意味であり、「この三昧を得ると仏が目の前に立ち現われるのを見る」と言われます。南無阿弥陀仏を唱えて、ぐるぐる行道していると、精神集中し、全てが清らかな状況になって、そして仏が現われて下さるといっわけでありましょう。「若しは沙門、「若しは」白衣(在家)」、沙門は僧侶、白衣は在家の人。「聞く所の西方阿弥陀仏刹(国)の、常に彼方の仏(阿弥陀仏)を念ずべし」、常に西方浄土の阿弥陀さんを念ずべきであると。その次に「戒を欠くことを得ず」とあります。戒律をきちんと守らなければいけない。聖人は精進潔斎して、この修業の道場に臨まれたと思います。「一心に念ずること、若しは一昼夜、若しは七日七夜、七日を過ぎて以后、阿弥陀仏を見たまつる」(大正一三、九〇五上)。修業は、念仏もそうですが、禅の方でも、七日続けて繰り返す、ということがしばしば行われています。ここでも七日七夜、この念仏をずっと続けると、夜となく昼となく念仏を続けるのでありますから、もう疲れ果てて、眠くなる。聞いた話であります。天井から垂れ下がっている縄があつて、そこに寄りかかってウトウトする、ウトウトしすぎると、おそらく

膝がガクツとくるんだろうと思います。びっくりして目が覚めてまた修業を続けるというようなことを、なさったのではないかと想像するのがあります。そういう修業をして、やっと「阿弥陀仏を見たてまつる」、阿弥陀さんの姿を拝むことができるようになる。「覚において見ざれば」目が覚めているときに見ることができなければ、夢のなかで見ることができるといってわけです。そんな修業を親鸞聖人は比叡山でなさっていた。

しかしながら、親鸞聖人の前には、仏様が現われて下さらなかったのです。聖人は何とかして仏様にお会いしたい、と願ったにも関わらず、どうしても現われて下さらない。そういう悩みといますか、どうしてだろうという聖人の思いは非常に強いものがあつたように思います。何故現われて下さらないのか。それはこの自分に理由があると考えられたのだろうと思います。結果は、一口で言えば「罪悪深重の凡夫の自覚」ということだと思えます。今に始まったことではない、前の世もその前の世もずっと、ろくなことをしてこなかったのだ、それで自分は「罪悪深重の凡夫」である。そういうわけで親鸞聖人は、このまま命が終わったらどうなるだろうかと修業中に考えられた。それが「後世」の問題になると思えます。ですから、「後世、後世、後世」と、恵信尼文書に出てくると思えます。

——地獄

親鸞聖人のお書きになったものの中には、地獄についての記述があまりないのです。ほとんどないと言ってもいいですね。ただ、たまに、地獄という言葉が使われています。親鸞聖人にとつ

ての地獄というのは、平安時代に源信僧都がお書きになった『往生要集』が、親鸞聖人の地獄という言葉の内容だったと私は思っております。どういうことが『往生要集』の中に書いてあるか。第一は「厭離穢土」、第二は「欣求浄土」であります。その「厭離穢土」の中に、第一、第二、第三、第四、第五、第六までありますが、第一が「地獄」であります。ここには地獄の恐ろしい有様が、細かくいろんな経論から集めて纏めてあるのです。「地獄」は娑婆世界の下にあるとされています。すぐ下にあるのは「等活地獄」、それから二番目に「黒繩地獄」、「衆合地獄」、「叫喚地獄」、「大叫喚地獄」、「焦熱地獄」、「大焦熱地獄」、それから一番下が「阿鼻地獄」、あるいは「無間地獄」とか「奈落の底」とかいうところが地獄の一番下であります。その地獄の恐ろしさ、人の体をノコギリで切り刻んだり、熱湯の釜の中に投げ込まれたり、いろんな地獄の恐ろしい有様が書いてあるわけです。そして平安時代から鎌倉時代の人々はみんなこの地獄の恐ろしさに、おそらく苛まれたのではないかと思います。

地獄と言いますと、そんな話は、非科学とか仮想の話ではないかと言われるかもしれませんが、れども、当時の人達にとっては、これはもう実在の世界なのです。考えなければならぬのは、今の我々の考えから、昔の典籍がどんな教えを教えてくれるかということよりは、まず最初に、私自身がその時代の有様をよく知るために、自分自身をその時代に置いて、その頃の人達の考えに立たなければいけません。その後で自分自身に頂くことは頂く。なぜそういう順序でなければならぬか。最初に自分自身に頂けるところだけ頂くというわけで、地獄は頂かなくてもいいものですから、捨ててしまうのです。そんなことでは正しい理解はできません。地獄がその当時

の人にどんな意味をもち、どんなに恐ろしい世界であったかということ、私どもがまずよく理解するにはいけない。私は「釈尊」を、仏教研究の最初の課題としたのでありますが、まず「釈尊」の時代に私の身を置く、そしてインドならインドに行ってみて、そこに「釈尊」がいらっしゃるものと考えたらどうなるだろうかと、身を置いてみて考える、それから自分自身に取り入れるものは取り入れる。こういう順序を踏みませんと、いきなり自分の都合のいいところだけを頂こうと思ってもですね、頂けないのではないかという気がいたします。地獄は平安時代、それから鎌倉時代の人にとっても恐ろしい世界だったと思います。それを、源信僧都が纏めておられるわけです。だから「地獄は一定すみかぞかし」という言葉は親鸞聖人にとっては、大変に切実な言葉だったと思わなければいけないわけです。

因みに、「三明」について。三つの明、つまり智恵ということであります。原始仏教以来、お悟りが開けたという時には、少なくとも三つの智恵が開かれるということが基本になっていきます。まず第一に「宿命通」であります。自分の過去のことをはっきり見えてくる。親鸞聖人にとりましては、自分は世々生々ろくなことをしてこなかった。「罪惡深重の凡夫」であるという「宿命」に対する智恵が、親鸞聖人に開けてきたということでもあります。それから二番目は「天眼通」。これは未来を見る目であります。このまま命終わったら自分は地獄行きであるということが見えてきたのです。親鸞聖人にとって比叡山で修業をされた第一の目的は、「常行三昧堂」で修行をなさりながら、目の前に仏様が現われて下さることを願っておられた。ところが、目の前に現われたのは地獄でありました。地獄ということになるとこんな恐ろしいことはないわけで

あります。親鸞聖人にとって、本当は「お浄土」へ行きたいと願っていたのに、「地獄」が現われた、ということだと思えます。「天眼通」がそんな形で働いたのだということであります。三つ目は「漏尽通」。漏は煩惱であります。煩惱が尽きるときに得られるところの通力、智恵、これは法然上人のところへおいでにならないと得られないということになります。そういうわけで、三明が完全に得られるようになるのは、法然上人のところへおいでになってからということになります。

——念仏

法然上人が何を説いておられたか。便宜上、「歎異抄」を挙げておきます。私の「歎異抄」の解釈・理解は少し今までの方と違うように思います。「歎異抄」の第二章から「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらさずべしと、よきひとのおおせをかぶりて」あるいは「こうむりて」、「信ずるほかに別の子細なきなり」というところによれば、親鸞聖人は法然上人のところにおいて、百日の間通い詰めに通われて、法然上人から頂かれたのは念仏でありました。比叡山でも念仏の行をされましたけれども、比叡山の念仏は心に仏の姿を思い浮かべて、仏が目の前に現われて下さるようにと念ずることでした。ところが法然上人のところでは、念仏は、声に「南無阿弥陀仏」と唱える、それだけでいいんだよという簡單明瞭な教えでありました。

これは仏教では、歴史的な展開を遂げてきた教えだと言えましょう。考えてみますと、仏教の

教えは「釈尊」に始まっています。「釈尊」の教えを聞いて悟りを得たお弟子、たくさんおられますけれども、一番年の若い人は七歳であります。七歳で悟りを得たという記録が何人かございます。「釈尊」の教えはそんな難しい教えでなかった、七歳の子供にもわかるような教えをお説きになったのだということは、私ども胸に刻んでおいていいと思います。今仏教界で、難しい話をなさる方がたくさんいらっしゃる。そんな難しい話は仏教にとっていかがなものでしょうか。七歳の子供でもわかるようなのが、仏教の元々の教えだということでもあります。

ところが「浄土教」、浄土の念仏の教えは、念仏を唱えれば浄土に往生できるというのでありますから、三歳の子供でもお浄土へ参らせていただくことができるはずでありましょう。ですから小さいお孫さんの手を引いて、ご老人が「さ、一緒に仏さまにお参りしよう」と言つて。家のお仏壇にお参りなさる。このように三歳の子供に、手を合わせて念仏を教えたというのが仏教の伝統、真宗の伝統だと思つたのです。それが今、家族制度が壊れてしまつて、バラバラになつて、老人がどっかへ行つて、若い人達はもう念仏を知らない、というようななつています。非常に残念なことであります。それからもう一つです、三歳以下はどうなるのか。例えば、水子と云うようなことになります。胎児のうちに命を亡くしてしまつて死産で生まれるというような場合もあります。これには親御さんが代わりにお寺に行かれる。お寺へ行つて、お経をあげて下さいと頼まれるでしょう。お寺ではお葬式のお経を簡単に読めばよろしい。何回かお寺へ行かれるうちに、話を聞いて段々と念仏の信仰がわかつてくる、理解されてくる。そうすると、自分は念仏を頂くことができた。考えてみると、あの子は自分のお腹を痛めた子ではあつたけれど、

実は我が子ではなかった。仏様から授かった子供だった。それで私が今こうして念仏を頂く身となつたのだ。水子は仏の子となり、こうして成仏できます。このように解決してきたのが、昔からの真宗門徒のお同行であります。これはお経の中に書いてない、と思います。書いてないけれども、同行の人が自分達でちゃんと産み出した教えだと思えます。これは大変尊い教えでありまして、ですから水子供養というのはきちんとお寺でできるものです。またお寺でしなくてはいいけない。そして水子を亡くした親がお寺へ参られたら、住職は水子のためにお葬式のお経を読んであげて下さい。そうすればそれが、立派に成仏できる道に繋がっていくと私は思います。ですから、念仏の教えは、どんな年齢の子供さんにも水子にも通ずる教えであるということでもあります。とにかく念仏の教えは、声に「南無阿弥陀仏」と唱えて救われる教えであります。

「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと」。「よきひと」つまり法然上人からその教えを頂いてありがとうございます、「南無阿弥陀仏」と信ずる他に、別の子細はないのであります。もし法然上人が間違つてよそへ落ちられる、地獄へでも行かれるということになれば、私もそれについて行きます、ということをおっしゃっています。「念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさうろうろ」。他の道を歩いても、とても自分は成仏できなかつたのに、この念仏を頂いて、お陰で念仏を喜ばせて頂いているけれども、しかし「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と。「地獄は一定」という言葉が出てきますが、親鸞聖人は「地獄」という言葉は、いろんな著作を調べても、多くは使っておられません。文献学者の見落とし易いところです。もっと文献の裏を見なくてはいいけない。親鸞聖人

の心を見なくてはいけないと思います。文献で回数を数えてみても、意味がありません。例えば、広島原爆の経験者で未だに自分の経験を語ろうとしないという方が何人もいらっしゃいます。それを思ってみても、親鸞聖人が「地獄」を見られたという方が何人かいらっしゃいます。親鸞聖人が「地獄」を見られたという方が何人かいらっしゃいます。それが何だったかは親鸞聖人はおっしゃってられないと思います。そのおっしゃってられないところを私どもは考えなければいけないと思います。「地獄は一定」であるという言葉の深い重みです。

【歎異抄】第一章

そこで「歎異抄」の第一章。「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなり」と信じて念仏もうさんとおもいたところのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたもうなり」。私はこの言葉が今まで何十年も理解できませんでした。この言葉につつかえただために、「歎異抄」についてお話することができませんでした。最近やっと、あ、こう考えればいいのだということで、お話ができるようになったように思います。「弥陀の誓願不思議」というのは、これは「名號不思議」と言ってもいいことでありまして、後ろの方、第十一条によれば、この「誓願不思議」と「名號不思議」とは同じところの表と裏であると理解できると思います。「誓願不思議」というのは阿弥陀さんのお誓いをたてて下さっている、みんなを救わなければならぬ、という誓いをたてて下さっているのは不思議という他はない。それが本当にわかったら自分は手を合わせて、「ありがとうございます、南無阿弥陀仏」といだけ、これが「名號

不思議」であります。自分のほうが「名號不思議」、阿弥陀さんの方が「誓願不思議」であります。この「誓願不思議」と自分の「名號不思議」が一つになる。それに「たすけられまいらせ、往生をばとぐるなり」。そこで文章が切れているのです。「往生をばとぐるなり」で実は文章が切れて完結しているのであります。往生ができるのであります。ところがつづいて、「と信じて」と書いてあります。「と信じて」というのは、第二章に「よきひとのおおせをかぶりて、信ずる」、ここに「信ずる」というのがあります。つまり法然上人の言葉を信ずるわけです。「往生をばとぐるなり」と法然上人がおっしゃった。それを信じて、「われ、念仏もうさん」であります。この私が念仏を申さん。「われ、念仏もうさんとおもいたところのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり」。つまり、「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせ、往生をばとぐるなり」。これは親鸞聖人の言葉ではなくて、法然上人がしよちゅうおっしゃっていた。と言うとどこか、法然の書かれたものなかに典拠があるか、ということを文献学者は必ず聞くとありますが、それは野暮なことでありませぬ。これが法然上人がおっしゃっていたことだということは、自然にわかるはずだと、私はそう思っております。今まではつきりとこれが実は法然上人のお考えを表わしている、と説明している解説書がほとんど見当たりませぬ。あつたら教えて頂きたいのですが、梅原猛さんがちよつとだけ匂わせておられますけれども、はっきり言い切っておられません。さらに第二章では、「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをこうむりて、信ずるほかに別の子細なきなり」と述べられています。第一章と第二章が同じ趣旨なのです。第一章と第二章が並べてあるのはその

ためと思われれます。そういうわけで法然上人のところへおいでになって、そして念仏を頂かれま
した。

——現前当来

ところで、私はもう少し親鸞聖人が比叡山で修業された、その目的について考えてみたいと思
います。それは目の前に仏が現われて下さることを目指したということであります。これは最後
まで、親鸞聖人の生涯最後まで願っておられたことであろうと思います。「子の母をおもふがご
とくにて」。幼子がお母さんを思うように、「衆生佛を憶すれば」。この私達が如来様を心に深く
思うならば、「現前当来とをからず」。目の前に如来様が現われて下さることは遠くはないであり
ましょう。「如来を拜見うたがはず」。如来様を拜見できることを私は疑っておりません。これ
は、八十三歳の時の「浄土和讃」にあります。八十過ぎてからもやっぱり親鸞聖人は、目の前に
如来様が現われて下さるに違いない、そう信じておられる、願っておられるのです。そういうわ
けで「現前当来とをからず 如来を拜見うたがはず」。如来様を拜見したい、拝みたい、目の当
りに拝みたいというのが、実は親鸞聖人の生涯の願いでありました。八十三歳になっても如来
様が拝めていないとすれば、後にも臨終以外にないでしょう。「臨終来迎」については、「阿弥
陀経」の中に、もしくは一日、もしくは二日、もしくは三日、…もしくは七日、繰り返し繰り返し返
し一心不乱に念仏を唱えるもの、その人は、命終わるときに臨んで「阿弥陀仏が諸の聖衆とともに
に、現じてその前にまします」とあります。臨終の時にお迎えを頂くといいことで「臨終来

迎」、そこに「命終の時に臨みて、阿弥陀仏、諸の聖衆」。「諸の聖衆」の中には恐らく私どもの御先祖も含まれているに違いない。私どもの御先祖も浄土へ行かれて、そして阿弥陀さんのもとにおられる、その人達も、一緒になって「現じてその前にまします」。私達の前に現じて下さるでありましょう。それ以外に恐らくは、親鸞聖人が仏にお会いできる機会はなくなつたと思うのです。

ところが、最近名古屋の文化センターの講座に出ておりましたら、「この写真を見て下さい」と聴講者の方から一枚の写真を見せられました。親鸞聖人の最後の御往生を描いたものです。その絵は岐阜市の歴史博物館に預けられている、岐阜の河野の六坊のお西の組合に伝えていられる【御絵伝】の第四幅に見られる絵であります。そこに親鸞聖人の最期の姿が描かれています。亡くなる時のお姿であります。薄縁うすべりが敷いてありまして、そして四角い枕が置かれ、聖人はその枕に頭を乗せていられる。その頭が動かないように、お弟子、たぶん頭智上人あたりではないかと思えますが、頭を支えていられます。この絵をどう見るか、蓮如上人の裏書きがある御絵伝であります。それ以上に遡ることは難しいかも知れません。しかし歴史的に古い絵が本場に親鸞聖人の最期の姿を伝えているだろうかということになりますと、「頭北面西右脇に臥し給いて」という、釈尊入滅図以来の「右脇」の作法に従って絵が書いてあるのが多数であります。河野六坊の絵は違います。こういう絵が出てきたというのは、親鸞聖人の最期についての理解の仕方が異なるということでもあります。中には親鸞聖人が仰向かれたまま亡くなっている。それを横向きに変えたというふうな絵もあります。平松令三さんが【親鸞】という本を書かれて(口絵)、横向き

の絵をレントゲンで撮ってみました。下から、仰向きに寝ておられる図が出てきたという指摘をされています。

『無量寿経』の中で五体投地と

『観無量寿経』の弥陀三尊

この河野六坊の絵は、私は、五体投地の図だと思っています。親鸞聖人はうつ伏せになっておられて、頭を上げられたんだろうと思います。つまり、臨終に念仏を唱えておられて、親鸞聖人の心には来迎された仏様が目に映るようになる。そこでうつ伏せになって五体投地をされた。そういう気持ちがこの絵に現われているように思います。これが歴史的にどうかということよりは、親鸞聖人の最期の気持ちが表示されていると思います。さっきの「現前當來とをからず 如來を拜見うたがはず」と言われているのを見ると、残るは臨終だけであります。八十三歳の時にはまだ如來の到来が拝めていないのです。ですから最期にこういうことになってきます。親鸞聖人のお気持ちは、仏を拝みたいという一心であったと思います。そしてそれは、親鸞聖人がお読みになっていたお経、特に「浄土三部経」、「無量寿経」とか「観無量寿経」いずれを見ましても、仏様がちゃんと目の前に現われて下さる場面が書いてあるわけです。

『佛説無量寿経』巻下には、釈尊が阿弥陀さんについて、どうして法蔵菩薩から阿弥陀仏となつて下さったか、どのようにしてお浄土が建立されたかとお説きになった後で、釈尊が阿難にお

っしやった。「仏、阿難に告げたまわく。汝起ちてさらに衣服を整え、合掌し、恭敬くきょうして、無量寿仏を礼したてまつるべし」、つまり阿難よ、そこに立ち上がって、服装を整え、腰に巻く布、それから肩からかける布、それからもう一つ手に折り畳んでかけている布、これが「三衣」であります。「三衣」で一着なんですね。「三衣」というから三着だと思ってる人がありますが、それは間違いで、三つの布で一着の衣であります。この衣服を整えて、合掌恭敬して、無量寿仏を拝みなさいと言われます。そこで阿難は立ち上がって、衣服を整え、身を正しくして、「表を西にして」つまり顔を西に向けて、恭敬し合掌して、「五体を地に投げて、無量寿仏を礼してたてまつる」とあります。私は、ここに書いてある「五体投地をして無量寿仏を拜む」ということは非常に重要なことだと思えます。これによって阿難尊者は目の当たりに、阿弥陀様とお浄土を拜むことができたということになっています。仏を拜むときには、私達は座って手を合わせるだけ、合掌するだけと教えられています。これでは不十分です。合掌はインドへ行けば友だち同士が挨拶する、挨拶の仕方です。「ナマステー」というだけです。「こんにちわ」というだけです。浄土真宗の歴史上、海外との交流が充分でなかったために、長い間、合掌だけでいいと思ってきたのでしよう。しかし、合掌だけで済ませているのは真宗だけかもしれないですね。他の宗派はやっぱり五体投地をしています。この間も名古屋の浄土宗の名刹「建中寺」に参りましたら、ちゃんと五体投地する場所がこしらえてあります。そういうわけで私は五体投地の礼を致しました。本気で阿弥陀さんが拝みたいというのであれば、五体投地しなければダメだと私は思っています。経典をもう一度よく見直して下さい。今迄よく読んでないと思えるのであります。

しかし、今のお寺の中には五体投地する場所がこしらえてない。台間で五体投地するしかありません。一般参詣者の場所です。私のところへはよく海外からお坊さんがこられます。特に南方の黄色い衣を着たお坊さんがよく来ます。彼等は一般参詣者のところ(台間)で五体投地をして、阿弥陀さんの前でお参りすることになります。ところが阿弥陀さんのことを彼等は知らないのです。阿弥陀さんを説明するのは大変骨が折れます。ただ私の寺の本堂の中には、正面上方に法輪が飾っており、裏に回ればお釈迦様の仏像がありますし、御絵像もあります。境内には仏舎利塔を建てております。仏舎利というのは手に入りません。お金では買えないものです。これは長年の友好関係と信頼がないと仏舎利は手に入りません。私の寺には幸いにも仏舎利が古くから伝わっております。その他に私の代になつてからもスリランカから仏舎利を一粒だけですけれども、頂いてきましたので、仏舎利があります。ですから門の脇に塔を建てまして仏舎利をお祀りしています。そんなわけで海外から来る人達は、最初何も知らず阿弥陀さんの前で五体投地をしなければならず、怪訝な顔をしているのであります。しかしお参りしなくてはと思つて、思い切つて五体投地をするのであります。やはり、真宗は国際的にもつと仏教として連帯感を持てるようにしなくてはなりません。仏教者として他の国々との仏教の交流を図るといふようなことになりますと、どこかにお釈迦さんをお祀りする必要があります。東本願寺は、山門の上にお釈迦さんをお祀りしてあります。誰も気が付かないだろうと思ひます。やつぱりきちんと拝めるような、例えば、五重塔を、阿弥陀堂の前の広場に立派に建てたらいではないだろうか、など思っているのであります。そうすればなるほどここは仏教だと、お釈迦さんをお祀りし

ているということが誰にもわかります。そういうことが、これからは考えられなければならないでしょう。

今まで七百年も、八百年間も、外国のことを何も知らずに、真宗は居眠りしてきました。この日本の中だけで信仰を純粹培養してきました。その結果が、外との交流を忘れてしまつて、明治以後になつてからちよくちよく開教に出掛けたのですけれども、どうしても違和感が出ます。これではやつぱりよくないですね。彼等の心を知らなくてはいけないのに、自分のことだけを伝えようと思つて「開教だ、開教だ」と言つて、どうも身勝手な開教になつていように思います。「無量寿経」の中での五体投地について述べました。

次に「観無量寿経」。この中では韋提希夫人が主役になっていますが、全部説明してると時間が足りませんから、一番大事なところを申し上げますと、「この語を説きたもうた時、無量寿仏、空中に住立したもう。観世音・大勢至、この二大士、左右に侍立せり。光明熾盛にして、具さに見るべからず」とあります。阿弥陀さん、それから両脇に観音、勢至の二菩薩、この三尊が空中にお立ちになつて、韋提希夫人に對せられているのです。韋提希夫人は、そこで空中に現われられた阿弥陀さんを拝んでいられます。こういう話が宗門の中で全然今まで話題として聞こえてきません。伝わっていないような気がするのであります。やはり大事なことでありまして、親鸞聖人はしよつちゅう「観無量寿経」を読んでおられて、阿弥陀さんが韋提希夫人のところへ現われられたのなら、私のところへも現われて下さつてもいいじゃないか、現われればきつと救われるということになると思ひますが、現われて下さらない。だから、「地獄行きだ、地獄行

きだ」ということで、最後まで、私は「罪惡深重の凡夫」であると、感じておられたのではないのでしょうか。最後まで仏の現前当来が実現されなかったことが、晩年「自然法爾」の思想が出た理由の一端であろうかと考えます。さてまた結婚されて、お子さんもたくさんいらつしやるわけです。これもですね「罪惡深重」と考えられた原因に含まれるかどうか分りませんが、それだけではないでしょう。もっと大きなですね、罪惡感というものがあつたに違いないと思います。

——法然上人と親鸞聖人

親鸞聖人はご自身、「罪惡深重の凡夫」であると思っていられたのですが、恩師の法然上人に對しては、非常に立派な方、仏・菩薩のような方として仰いでられるわけがあります。「源空讚」に、「本師源空の本地をば 世俗のひとつ／＼あひつたへ 綽和尚と稱せしめ あるひは善導としめしけり」と言われています。世人は法然上人の本地を尋ねてみると、道綽禪師か善導大師の生まれ変わりであると言っわけです。この二人に曇鸞大師の三師が中国の七高僧です。その次はもつとすこいですね。「源空勢至と示現し あるひは彌陀と顯現す」。勢至菩薩や阿彌陀仏の生まれ変わりではないかと思われて、「上皇 群臣 尊敬し」、上皇の左側に「こくわふなり」としてあります。それから「群臣」はこれは「たいしむ くきやうなり」。大臣や公卿達がみな尊敬している、それから「京」と「夷」の田舎、さらに「庶民 欽仰す」と。国をあげて源空上人を尊敬していると述べています。

その次。「道俗男女豫参し 卿上雲客 群集す 頭北面西右脇にて 如来涅槃の儀をまもる」。

つまり、法然上人が亡くなる時は大勢集まった中で、「頭北面西右脇」の姿勢であつて、「如来涅槃の儀をまもる」。つまりお釈迦様が涅槃に入られた時のお姿を守つて、法然上人も同じ姿勢で亡くなったとされています。だから親鸞聖人も同じように「頭北面西右脇」で亡くなったと『御伝鈔』に書いてあるわけです。そこに問題があるということは、先程申し上げました。「本師源空命終時」、法然上人が亡くなる時、建暦二年、つまり「壬申」の歳の、「初春」は一月の「下旬」ですから、二十五日に、「浄土」にお帰りになりました。これは、法然上人が亡くなった時のお話ですが、「命終その期ちかづきて 本師源空のたまはく 往生みたびになりぬるに このたびこととげやすし」。ここで、「往生みたびになりぬるに」、つまり極楽往生が三度目であると言われています。これはどういうことなのか。これは大事なことでありまして、きちんと説明する必要があります。今まであまり説明されてないような気がいたします。どうして三度になるかと。実はあとの『和讃』には「衆生化度のためにとて この土にたびくきたらしむ」とありますから、三度でもなくても四度でも五度でもいい、度々ですから。

親鸞聖人が亡くなるのは、法然上人の亡くなった時から数えて四十年ばかりあとになります。法然上人が亡くなった時、親鸞聖人は遭つていられません。聖人は、流罪で越後においでになりました。京都へ帰ろうとされたら法然上人は亡くなりました。それ故、法然上人の最期については、あとで人から聞かれたことであります。

往相と還相

ところで親鸞聖人のお書きになった『教行信証』、これが今は、浄土真宗の一番の大きな拠り所になっているわけであります。『教行信証』というのは主に関東で四十代、五十代の時に草稿をお書きになった書物であります。ところが親鸞聖人はその後九十歳まで生きておいでになります。ですから親鸞聖人のお考えが、その間に多少変わってきておられても当然であります。どこが違うかということが問題であります。ですから八十代になられてからお書きになった『和讃』その他晩年の著作をもっと読まなくてはいけないでしょう。

『教行信証』に説かれていることは、この世からお浄土へ参らせて頂く「往相」、そして、浄土へ往生できるというのは、阿弥陀様のお与え、お恵みであります、ということ。「回向」だと言われます。これが「往相回向」であります。そして「往相回向」について真実の「教行信証」があると説かれています。ところがお浄土からこの世に帰ってくるのは「還相」であります。それも阿弥陀様のお力のできる、というので「還相回向」といわれます。ところが、お浄土からこの世に帰ってくるというのは、私どもの経験を超えていることでもあります。ですから親鸞聖人も『教行信証』の中では、「還相回向」について、証の巻で少し触れておられますけれども、あまり詳しくは述べられていません。

『和讃』になりますと、自利の「往相回向」だけではなくて、しきりに利他の「還相回向」が

あつて初めて回向が完成するのだという考え方を出していられます。どうしてあのお浄土からこの世に帰ってくるのが議論できるかというと、弥陀の本願の中の第二十二願によるわけです。この世からお浄土へ行くのは十八願もいいでしょう、十九願も、あるいは二十願でもいいでしょう。ところがお浄土からこの世に帰ってくることについての議論になりますと、二十二願以外にないでしょう。【無量寿経】の二十二願は、理解するのになかなか難しい文章です。難しいです。要点は二つ。一つは「一生補処」ということであります。それから「衆生のために菩薩の行をする」、衆生利益のために菩薩の働きをするということでもあります。ですから親鸞聖人も【和讃】の中で「安楽浄土にいたるひと、五濁悪世にかえりては」、お浄土からこの世の中に帰ってきた時には、「釈迦牟尼佛のごとくにて」お釈迦様のように「利益衆生はきわもなし」、みんなのために働く、仏・菩薩となつて「還相」するのであるとおっしゃっています。「往相」でお浄土へ行くのでありますが、これだけでは自分の安楽・利益を考えているだけだと、思われます。「自力」のためにお浄土へ行つただけでは、仏教は完成しません。利他のためこの世へ帰つてきて仏・菩薩として働かなければなりません。そういう考え方が実は「歎異抄」第四章の中に出ています。

「今生に、いかに、いとおし不便とおもうとも、存知のごとくたすげがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏もうすのみぞ、すえとおりたる大慈悲心にてせうろうべきと」。この第四章も、実は「往相」「還相」を考えなければ、解決できない章でありますのに、今までの解釈はあまりその点について触れておられません。もう一度考え直さねばならない章だと思えます。還相を考えないがために、この世で「なんまんだぶ」と唱えれば、お浄土へ参らせて頂けると、

それだけしか考えてないみたいです。なんと易しいありがたい教えであるか。しかし、それだけでは「自利」です。念仏の教えは「往相」でお浄土へ行って、そのままお浄土で成仏しないで、一生補処の身となる。つまり、成仏したい人はしてもいい。この世でもう充分やり終えたという人は、お浄土へ行って涅槃に入ってもよろしい。しかしながら、もう一度ちゃんと帰ってきて他の仕事をしたいという人は、お浄土を最後の地とせず、一生補処の地としてもう一度この世へ帰ってくる事ができる。今、弥勒菩薩は兜率天においてになって、やがてこの世にお生まれになられて、仏とられる。お釈迦様も兜率天からこの世へ来て仏とられた。兜率天は釈尊にとっても、弥勒菩薩にとっても「一生補処の地」だといわれます。この娑婆世界を「一生補処の地」として、お浄土に行つて、そこで仏とならずに、お浄土をまた「一生補処の地」としてこの世に帰ってくる。そうすると、とても長い時間の話でありすが、娑婆世界とお浄土を巡回することが出来るわけがあります。この一生や二生の話ではないでしょう。とても長い時間、大きな宇宙を考えなければ、考えが及ばないようなそのような世界の話であります。そんな話を真に受けられるかと、いうふうにおっしゃる方は、それはそれでよろしいけれども、しかし經典を読んでも、そういう大きな世界を考えたり、無限大の時間を考えるという気持ちにならないと、仏教は理解できないのであります。この世で終わつてお浄土へ参ればいいと、それだけでおしまいだというような簡単な教えではないのであります。この循環の中に入ることが、私どもにとって求められるわけがあります。この「往相」と「還相」のこの大きな輪の中に入るにはどうしたらいいか、それが【和讃】の中に示されておます。

「不退のくらゐすみやかに えんとおもはんひとはみな 恭敬の心に執持して 彌陀の名
號稱すべし」

不退の位でありますから、もう退ぞかない。正定聚の位であります。それは現世で得られるから、現生正定聚といわれています。現生正定聚の身となった人は、この「往還」の、行ったり来たりする輪の中に入ることができる。そしていつでも好きな所で成仏できるのでありますけれども、それは菩薩としての行を為し終わって、「ああ、もう自分としては為すべきことはなし己った」のだと。釈尊のへ悟りの言葉に「為すべきことは、為し終えた」というきまり文句がございます。その時にどこであつてもよろしい、この娑婆世界であつてもよろしい、それから浄土へ行つてからでもよろしい、あるいは宇宙のどこか他の世界へ行つてからでもよろしい、そこで自分の仕事は為し終えた、考えた時、そこで涅槃を得るのです。そこで成仏することができますのであります。

真宗の教えは一口で言えば、「念仏・成仏これ真宗」であります。善導大師に近い方がおっしゃったようではありますが、最後の目的は成仏に違いありません。しかし念仏が入口であります。念仏してそして最後は仏となる。つまり涅槃に入る。成仏と涅槃とは厳密には区別すべきでしょうが、その涅槃に入る前に為すべきことをなさなければいけない。この世であろうとお浄土へ行つてからであろうと、為すべきことはなす、それは菩薩の行であります。念仏を唱えながら、念仏を唱えていてもそれだけで終わらないと思ひます。ここで今一度参照すべきは、「歎異抄」第四章です。そこには聖道の慈悲に対して浄土の慈悲がすぐれていると述べられています。慈悲行

が「すゑとおりたる」道であると言われています。これは言いかえれば還相回向して菩薩の行をつづけることでしよう。普賢菩薩の行が菩薩の行の中の最高の行だと思われれます。因みに比叡山の常行三昧堂の「にない堂」ですね。片方は常行三昧堂、本尊は阿弥陀さんであります。片方の法華堂には普賢菩薩が祀られているのであります。そういうわけで「往相回向」と、それから「還相回向」して、私どもは念仏を繰り返しながら、利益衆生していくのが、最高の普賢菩薩の行であるということがいえるのではないのでしょうか。

——来迎のこと

それから、「末灯抄」の第一章。「来迎」について述べてあります。特に命終わる時にお迎えを受けるのが「臨終来迎」であります。河野六坊の御絵伝は、親鸞聖人が、臨終を迎えられた時、五体投地されたという考えで描かれています。これは後代の絵でありますけれども、しかし親鸞聖人の考えに合致していると私は考えます。親鸞聖人の亡くなる時には、仰向けに亡くなったに違いないという考えもありましょう。「頭北面西右脇」の姿勢は楽ではありません。右脇を下にして休むというのは不自然なところがあります。お釈迦様がそうできたのは、毎日毎日、行をしておられる。頭陀行をしょっちゅうされているから、簡単にできたと思います。頭陀行では体を横にせず、お休みになりました。修行ができていたから「頭北面西」ができたのです。法然上人も「頭北面西」で亡くなりました。親鸞聖人もそうだったというふうに「御伝鈔」には書いてあります。多くはそれに従ってきたわけです。

それから親鸞聖人が亡くなった時にお側にいた覚信尼公が、母君の恵信尼公の許へ手紙をお書きになっていて、聖人の亡くなる時には何も変わったことはありませんでしたと、いう意味のことを書いておられるのですが、それはそうだろうと考えます。私は命が終わる時には何が起こるか、必ずしも外から見ていただけではわからないと思います。心の中に起きていることが、簡単には外からはわからないことが少なくないでしょう。特に臨終の場合、自分のことを言うのは恐縮ですけれども、私の母が命を終る前でありましたが、病院のベッドで寝ていて、たまたま妹が枕元にいました。その時母が窓の方を指して「ああ、お迎え」とかなんとか、声がよく出なかったのですけれども、指をさしたものですから、「あ、お父さんお迎えに来たの?」と聞いたら、嬉しそうになづいたそうです。この場合は指さしたのでわかったのであります。しかし、命を終る時の不思議は簡単には外からはわからない。法然上人の最期に「頭北面西」で亡くなる時の絵があります。西の方から、阿弥陀さんや菩薩方が雲に乗って来迎される姿が描かれています(『拾遺古徳伝』)。ところがその時、法然上人の回りに大勢の人がいますけれども、来迎について誰も気がついてないように見えます。来迎があつたかどうか、外からはわからない。そう思わなければならぬ。いろいろな不思議なことを私どもは考えなければいけません。『末灯抄』の第一章には、「来迎は諸行往生にあり。自力の行者なるがゆへに、臨終といふことは諸行往生のひとにいふべし」。臨終にお迎えを受けるということは、きちんといろいろお膳立てをして、お迎えを受ける準備をすることが、平安時代から流行りました。特に有名なのは『栄華物語』に出てくる藤原道長の話です。これは、立派なお堂を立てて、仏さんを九体並べて(九品仏)、仏

さんから五色の糸を引いて、道長が最期を迎えます。周りには、天皇、皇后はじめ、群臣がきら星のごとく並んでいる。そういう中で命を終わっていく。有名な話であります。道長の娘は皇后になったり、また皇太后にもなっている。それから皇太子妃にもなっている。三代揃って自分の娘が天皇家に入って、その子は天皇になるというような栄耀栄華を尽くした藤原道長の話であります。これは一例でありますけれども、自分の最期にはお迎えを頂きたい、臨終には来迎を頂きたいという考えが広く貴族社会を中心に日本中に広がった。今日でもお迎えを待つという言葉でよく出てくるわけです。「もうそろそろお迎えが来てもいい番だ」というようなことを、みんな言っているわけであります。その昔、平安時代に源信僧都がお書きになった『往生要集』の中に、臨終の行儀作法の在り方が書かれています。臨終に当り仏さんをどうお祀りするか、どんなふうにお迎えするかと、縷々書いてあります。それが貴族社会から全国に広がります。鎌倉時代にはすごく行なわれたに違いないですから、今日で言えば、葬式を華々しくやるようなものでもあります。派手にびつくりするようなお葬式をやって、これでないと往生できないぞ、と言われたら、これは誰でも馬鹿馬鹿しいと思うに違いないのであります。そういうわけで親鸞聖人も、来迎ということをやかましく言うべきではない、普段からしつかり念仏を頂けばこの世で正定聚の位で現生正定聚である。「来迎をたのもことなし」、来迎を頼まなくてもよろしい、普段からきちんと浄土へ参らせて頂ける身となる、この世で、すでに浄土に生まれることが定められた仲間に入れてもらっているのだ。念仏一つ「南無阿弥陀仏」と頂けば、それでいいのだという考え方ですから、親鸞聖人は、『末灯抄』で念仏の「信心」について、「他力のなかの他力なり」と言わ

れています。この言葉は随分思い切った言葉だと思ふのです。法然上人はそのようにはおっしゃらなかつたのです。法然上人の言葉は「末灯抄」一七を見て頂くとわかると思います。「他力のなかには自力とまふすことは候とききさふらひき」。「ききさふらひき」というのは法然上人から聞かれたこととあります。それから「他力のなかにまた他力とまふすことはききさふらはず」、聞いていない。他力のなかの他力ということはないのだと言われています。ですから「末灯抄」の第一章とそれから第十七章とは矛盾してはいるのであります。「高僧和讃」にも同じ表現があつて「この心すなわち他力なり」とだけにされています。何故、親鸞聖人は法然上人の言葉を超えてまで、そういう矛盾した表現をなさつたのかというと、社会的に今申しましたような、恐らく無駄なお葬式がいつぱい行なわれていた。そして「眞實信心」に暗い人達がいつぱいできてきた、ということが背後にあつたと思います。

最近のこと、念仏は「他力の中の他力である」、これ以上尊いものはない、絶対他力である、しきりに説いている先生がいらつしゃいますけれども、どうもおかしいな、親鸞聖人の言葉が本当には理解されていないのではないかと、思われます。「他力の中の他力」という、絶対的な言い方は、仏教に相応しくありません。「自然法爾」というのが聖人の晩年の言葉であります。自然にというのは仏様の思し召しの通りに、なるがままに、法のままに自分が生きさせて頂くということでありまして、「他力の中の他力である」と頑張つて言うのはちょっとおかしいのであります。

おわりに

そういうことで、私どもはよくよく考えてみますと、浄土真宗の教え、念仏の教えというものの、あるいは浄土教の教えと言ってもよろしいが、つまりは浄土の教えの極まるころというものが、どこに極まるかというところ、今申しましたように、まず「往相回向」で浄土へ参らせて頂く。これで正定聚となる。そして二十二願の「還相回向」で菩薩となつてまた帰る。この「往相」と「還相」の輪の中に、今日ただ今、この世において念仏を通して入れて頂く。これが現世正定聚です。そして大きな流れの中に生き、働かせて頂くということが、自利利他円満して浄土の教えの極まるころと思うのでございます。

記 分かりにくい口述の原稿を起して下さった事務局に謝意を表します。